



幸福とは自足的で永続的。とすればその活動によって得られる快が大きいとしたら、脳は疲れを感じてしまい、中断し、永続性ではなくなる。また、その快がないとすれば、それは幸福ではない。なぜなら幸福には快がつきものだからだ。しかるに、幸福によって得られる快はそれほど大きくはないことがわかる。快樂と苦痛は対極をなすものであり、快樂が苦痛より大きい活動は趣味を、苦痛が快樂より大きく、何かに役に立つことをするのが頑張ることである。これによって麻薬や肉欲から峻別される。

また、幸福とは自足的だから、何か外的なものが必要であるとは限らない。それは観照的な活動であり、知的卓越へと至る道である。知的卓越とは智慧、知慮を指す。知的卓越性を得るには、言語や経験によって長期記憶に記憶する必要がある。それをするには時に労力が必要となり苦痛を感じることもあるだろうが、それは何においても慣れないうちはつきものの苦痛であるし、知的卓越以外にも当てはまるので体の一部として扱えない物事の開始において苦痛は避けられない。

このようなことを始めるその人は何かのために頑張る人である。そして知的卓越性のために頑張っていくうちに慣れてきて習慣化する。習慣化すれば苦痛は退けられ、僅かな快として持続し自足する。これが熟練である。

知的卓越性とよべるその知において最高なるものは真であることであり、その反対は偽であることである。偽にも善き偽と悪しき偽とがあり、善き偽りとは例えば人を害さないもの、却って発展を促すもの、悪しき偽りとは人を害し、発展を阻害するものである。善き偽りは例えば「嘘も方便」とあるように、また、偽であったが、それに気づかず、検証の価値によって偽と確認することなど。悪しき偽りとは、相手のことを陥れるために、あえて間違った方向、失敗へと導くための偽であったり、また権力者が自分の保身のために真実を述べないことである。

また偽には、質として善きもの、悪きもの、結果として善きもの、悪きものがある。

質として善きもの、とは何かの改善のために提唱する場合や、自分より相手を思っただけの偽であるが、結果としてむしろ悪くなること。

結果として善きもの、とはその偽は何ものを改善も予定していなかったが、結果として改善された場合

子供とは、快によって物事を判断する。

青年とは子供の頃ほどの快を感じなくなることである。

大人であるとは、幸福的な小さい快を選ぶことである。

しかしながら子供も青年も子供も熟練のための苦痛を要する。

熟練して身に着けた知性の実行が人の役に立ち、新たな快、自分の外に起因する快を生み出し生きがいとなる。

全ての国は全ての人類の幸福へと至る方法を実行しなければならない。

また、そのためには、真なるを最も善きものとし、一部で善き偽りの知的卓越性を目指さなければならない。

が、現在、人々は各個人のみでの向上を追求し、全体的な思考をしているように見えない、全体的な思考をしていれば、一方では肥満の国、一方では飢餓、栄養失調の国は生まれなかったはずである。このような事態を無くすために、我々はどうすべきであるか。

それは不正なる行為、悪しき偽りや働きに正当な還元なき搾取を旨とし、それでいて強いものから強さを奪い、それを現実なる真理の一つとして受け止めながら、しかしそこから真実の究極的な人間の理想を追い求めることである。

どの人間、組織も自分の枠内の立ち位置しか考えてないようであり、自己から到達目標を定めているが、この理想を設定することで、人類皆が究極的なものを追求し、結果、善き世界となる。

善き人間とは

善き人間とはすなわち幸福な人、知的卓越者かつ倫理的卓越者である。

しかし生まれたとき、赤子である。

ではどのような戦術をとればよいか。

教育と遊びによってそれは成される。

遊びは教育の前段階である。言葉のある程度覚え始めたころ、論理的素養、戦略学的素養を身に付けさせるために、例示によってそれを教える。論理学では

例えば「A君は甘いものが好きだ。Bは甘いものである。だからA君はBが好きだ」などの簡単な流れから世の中には論理学という学問分野があることを早期から知らしめて、またその手法を意識させる。これを日ごと行う。すれば思考する際、自ずと論理的な思考が何か掴むことができる。

また教育段階になると、論理学の遊びからユークリッド幾何学へと発展させる。なぜならユークリッド幾何学は直観的にわかる公理から始めて定理を導き出す、思考の深め方を学ぶことができるからである。

戦略学では究極理想を教え込むことはもちろんだが

遊びの段階で子供に将来の夢を聞く。子供は魔法使いなどと無理なことを述べるが、あえてそれになれる方法を一緒に考えて、その考えていく段階を子供に見せる。

また、無理なことを何でも学問に結びつけると良い。これが善き偽である。

魔法使いの場合で言えば、魔法は四大元素の属性があることを教え、火、水、土、風のどの魔法使いになりたいかと聞いて、風と答えたら、大気循環や上昇気流、空気分子の存在などを教えて地学、地理学、物理学、そこから数学の存在を子供に意識させ、大気循環がどのようなものであるかなどを論理的に教えてやる。

例えば上昇気流は熱いところから生まれる。太陽がたくさんあたる場所は熱い。

だから太陽がたくさんあたる場所に上昇気流が生まれると。

そして気流は空気という小さな粒のあつまりで、熱ければ蒸気をみたらわかるように、上に昇っていく。これが上昇気流。宇宙は冷たいから、地球から上にいけばいくほど冷たくなる。冷たくなると氷をみたらわかるように縮こまる。縮こまると小さなものがたくさん集まって目に見える

ようになる。一つの小さな粒の重さもあつまったらそのぶんだけ重くなるからやがて落ちてくる。などのことを子供と親は真剣に子供に教える。

空気循環を感覚的に教えたら、次はどのようにして風の魔法使いになるか。

大学を目指すことを促す。また魔法使いは日々の鍛練が必要であるともっともらしく教え、日々の勉強をも促す。これを続けさせるには親の協力が必要である。

なぜなら子供は快を選びがちであり、熟練しないうちは苦痛が伴うだろうから。

しかしながら論理的、幾何学的素養を身に着けさせるやり方や戦略から目的の要素を分析して戦術を練るやりかたに私は子供が苦痛を感じるとは思えない。

子は親を見て育つならば親が熱心に子供に語りかけてくる姿に、子供は却って喜び生きがいを感じるはずである。だから親の期待に応えようと頑張る。

むしろ制限時間つきの誰も見てくれない義務を負わせるとそれを実行する可能性は低いはずである。

このような方法をもって子供に学問を意識させる。

しかし、これは知的卓越性を身に着ける方法に過ぎず、

もろもろの倫理的卓越性、勇敢、親愛、機知、節制などはどのようにして身に着けさせればいいのか。勇敢は体力的な自身、親愛は友達、から身に着けられそうなきがする。

また、この世に矛盾を見出したら、悪しき偽りが間違っていて、そのような大人も存在することを教え、反面教師とする。

親は常に子供に対して知的にも倫理的にも卓越していることを示し尊敬の対象とならないといけないが、実際に卓越していない場合、かえってしない方が良く、教育のため卓越するよう親自身が努力することは子供の胸を打つだろう

機知に関しては学問を意識させる日頃の親の教育によって学問に関する用語が頭に残っているはずだから出てくるようになるはずである。

学校教育が変わり、子供の学力に差が出るとしたら、その予防策は親がとるしかない。

だから親の教養として論理学を学んでおいて欲しい。上記が正しいとしたらだが。